

香川県におけるイノシシ分布拡大と被害対策

川原 健史

イノシシは現代の日本人にとってとてもなじみの深い動物である。干支のなかにもある。小学生以上でその姿を知らない人はほとんどいない。

イノシシは現代においても重要な狩猟獣であり、さらに農業に対して強力な加害獣である。最近では中山間地域の過疎化と離村に大きな影響を与えている。イノシシは狩猟鳥獣として各地で狩猟されている。しかし、そのような高い狩猟圧にもかかわらず、イノシシは増加傾向を示し、いままでもあまりイノシシによって農作物に被害を与えられていない地域でも、イノシシによる農作物への被害が出てきている。

近年日本の農村部では、高齢化社会の進行や、若年層の農業離れ、都市への人口流出が深刻な問題となっている。そのため、野生動物による農作物被害は、過疎化の進行や農業従事者の高齢化による農作業の衰退に拍車をかけるなどの社会的な問題となっている。そのなかで、近年特に被害が顕著に表れている香川県では、平成8年頃から県南部の中山間地域において被害が急増している。平成11年度には、水稲や野菜を中心に被害面積は125ha、被害量は150t、そして被害金額は約4千万円となっている。

農業従事者の高齢化が進むなかで野生動物による農業被害の拡大は、農業人口の減少や、地域の過疎化に拍車をかけることも考えられ、効果的な防除対策の構築などによる被害軽減が課題となっている。

イノシシによる被害が急増している香川県において、農作物などの被害状況の調査や被害防止対策技術の検証を行うとともに、その対応や被害対策をいそいでしなければならない。そのためには、まずイノシシの生態を

知る必要がある。しかし、いままで科学的な研究はあまりなされておらずイノシシの生態はあまり知られていない。その多くは、ハンターなどからの見聞程度であった。今回、ラジオテレメトリー調査と胃内容物分析などの新しい分析方法を使ってイノシシの農作物への加害パターンなどを解明することを目的とした。

イノシシの分布拡大の原因の1つに、耕作放棄地の拡大と山林の利用集約度の低下がみられ、これらが時期を同じくして進行したことによって、イノシシにとって棲みやすい環境を提供したことになった。今回の胃内容物分析とテレメトリー調査の結果から食性と生息地の環境、さらに行動圏について検討を行った。この結果から季節的な移動をしながら、イネが実るころになると水田近くに姿を現し、人間活動の少ない深夜になると実ったイネの穂を食べていると考えられる。また、堅果類が落ちだすような季節になると集中的に広葉樹林帯を利用するとも考えられる。

中山間地域の限られた耕地で耕作している農業従事者にとっては、イノシシの分布拡大と生息数の増加が直接農業被害につながっているといっても過言ではないほどである。イノシシの1年に2頭～8頭産み、半数が生き残るという繁殖力もさることながら、イノシシの分布拡大が、人間の土地利用にも影響を受けていることを考えるならば、今後のイノシシとの共存のあり方のなかで検討すべきことがらである。

イノシシは1回の出産で数多くの子を産むため、個体数を抑制しておくことは非常に困難である。狩猟に対するイメージが悪くなり、ハンターの数が減少し、さらにハンターの高齢化が進んでいる状況で、将来にわたってその担い手を確保することは重要な課題となっている。イノシシを里山から排除することができないならば、被害そのものを防ぐことはできないだろう。イノシシの加害対象が農地だけに限定されてる。防護策などの手段は江戸時代ごろから全国的に建築されたシシ垣が有効性を物語っている。耕作地の周辺をイノシシの好適な環境でなくすことが必要であり、耕作地

をイノシシから防除しやすいようにすることが必要となってくるだろう。しかし、過疎化、高齢化が進行した里山の農村部では継続的な防除は難しいだろう。こういったイノシシと農業従事者との追いかけっこが農業の衰退に拍車をかけているとも考えられる。衰退しつつある農業と中山間地域の過疎化をくい止めるためにも行政の対策が必要となってくる。

イノシシによる農作物被害を確実に防除できるという方法はない。対策として、有害鳥獣駆除による捕殺や電気柵、ネット、トタン、忌避剤散布などを実施しているが、経費や手間、農地の条件などによりどの対策にも一長一短があり、一様に導入できないのが現状である。イノシシは貴重な野生動物であり、肉利用もできる自然資源である。狩猟や駆除だけに頼るのではなく、かつて大がかりなシシ垣が日本各地に建設されたように、農業従事者が耕作地を確実に守ることが大切になってくる。しかし、農業従事者の高年齢化が進んだ現在ではなかなか防除もままならないことも多くある。イノシシに追われるように耕作を諦めるということもある。比較的效果の高い電気柵などは設置経費が高くつくという問題点もまだ残っている。

中山間地域の産業である農業を守り、農業離れなどによる過疎化の進行をくい止め、里山の貴重な自然を残していくためにも、自治体、農業従事者、狩猟者などが今後のイノシシのあり方について方向性を定める必要がある。